男

　またあの男から電話がかかってきた。
　今度は何だ？
　自治会の会長である私は少しうんざりした。
「キャッシュカードが見つからず、銀行で手続きをして新しいキャッシュカードを作りましたが、なくしたと思ったキャッシュカードが出てきました。どうすればいいのでしょう」
「古いキャッシュカードは使えません。銀行に持ち込んで廃棄して貰って下さい」
　後期高齢者の一人である男は、何かにつけて私に電話をかけてくる。
「老後の蓄えが底をついた。どうすればいい」という問い合わせもあった。その時は親族か市役所に相談してみてはどうかと答えたが、その後市役所から私に電話があり、あの男は民生委員が対応しているので自治会長が相手にする必要はないとのことであった。
　あの男はひとり暮らしの老人で民生委員の見回り対象になっている。それは知っている。だが民生委員もあの男のしつこさに少しうんざりしているようだ。
　あの男からの電話だとわかっても、それでも私は受話器を取ってしまう。無視すればいいのかもしれない。だが、もし本当に何かあったとしたら、そう考えると突き放すこともできなかった。
　男はいつも電話でつまらないことを私に尋ねてくる。おそらく誰かに寄り添ってもらいたいのだろう。
　私は週に一度見回りを兼ね男の家を訪ねることにした。
　今朝私は自治会の委員会を済ませたあと、男の家へ向かった。瀟洒な家であったがポストはチラシであふれていた。インターホンを押すと、しばらくしてドアが開いた。顔を出した男はいつもより小さく見えた。パジャマ姿で、髪は乱れている。
　瀟洒な外観とは裏腹に玄関の隙間から見えた室内には、弁当の容器や空き瓶、郵便物が散らばっている。テーブルの上には、封を切っていない封筒が何通も置かれている。
「郵便物は内容を確認した方がいいですよ」
「会長が見て下さい」
「個人情報ですから、見るわけにはいきません」
　男は驚いたように私を見た。そして少しだけ笑った。
「……そうでしょうな。……やっぱりそうですよね」
　男の声にはなぜか安堵したような響きがあった。
　先週も、先々週も同じような会話をした。
　ただし今日は、帰り際、男が「会長さん。次に何か分からないことがあったら、誰に電話すればいいんでしょう」と言った。
　私は、意外な問いに驚いて、すぐには答えられなかった。
　私はしばらく考えた後、スマホで地域包括支援センターの電話番号を確認し、メモに書き写し男に渡した。
　男は安心したように息を吐いた。
　家に帰ってから私は自治会の名簿を開いた。そしてひとり暮らしの高齢者の欄を見つめた。
　あの男だけが特別なのではない。声をかける相手を失った老人は、ほかにもいるに違いない。
　あの男は私に教えてくれた。ひとり暮らしの高齢者の見回りについて、その連絡体制の不備を。同時に自治会、民生委員、行政の連携の重要性を。
　私はさっそく自治会の議長に連絡をとり、高齢者に対する見守りについて次の委員会の議事とするよう要請した。